

部分論理関数とドントケア

- 部分論理関数：定義域が部分的な関数

- 入力値に意味が無い場合がある
- ドントケア入力

例

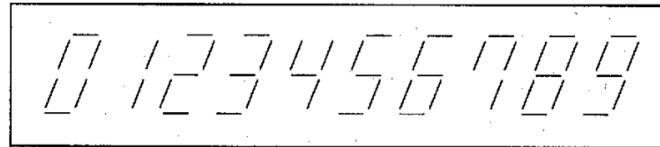


図 3.10 数字の 7 線分素子表示

$x_3x_2x_1x_0$	f_1	f_2	f_3	f_4	f_5	f_6	f_7	線分素子表示
0 0 0 0	1	1	1	0	1	1	1	0: /
0 0 0 1	0	0	1	0	0	1	0	1: /
0 0 1 0	1	0	1	1	1	0	1	2:
0 0 1 1	1	0	1	1	0	1	1	3:
0 1 0 0	0	1	1	1	0	1	0	4:
0 1 0 1	1	1	0	1	0	1	1	5:
0 1 1 0	1	1	0	1	1	1	1	6:
0 1 1 1	1	1	1	0	0	1	0	7: /
1 0 0 0	1	1	1	1	1	1	1	8:
1 0 0 1	1	1	1	1	0	1	1	9:

x_3x_2	00	01	11	10	x_1x_0
00	1			1	
01				1	
11	*	*	*	*	
10	1		*	*	

ドントケア入力での出力は*と書く
最簡形が簡単になるように*を0,1
好きなように読む
(1110, 1010)を1, その他を0と読むと良い

1010-1111の範囲の入力には意味が無い



論理関数の簡単化

$$T(f) = \bigcup_{p_j \in Q} T(p_j) \quad Q \subseteq P_j$$

- (a) $|Q|$ が最小
- (b) 式全体で使われるリテラルの個数が最小
($|Q|$ が同じ組み合わせが複数あったら)

- カルノー法
 - 3～6変数に適用可能
 - 分かりやすいけど、見落としなどミスもある
- クワイン・マクラスキ法
 - 変数が多くても大丈夫
 - プログラムしやすい
- コンセンサス法など他にも多数の方法がある

クワイン・マクラスキ法のための準備

● 部分積項の系列表現

- 部分積項を「0, 1, -」で書く書き方
- 肯定リテラルを1、否定リテラルを0、無い変数を-で書く
 - 例：5変数 $x_1\bar{x}_2x_3\bar{x}_4 \rightarrow 10-1-$

● 併合：1文字違う系列表現ペアを併せて違うところを-に置き換え

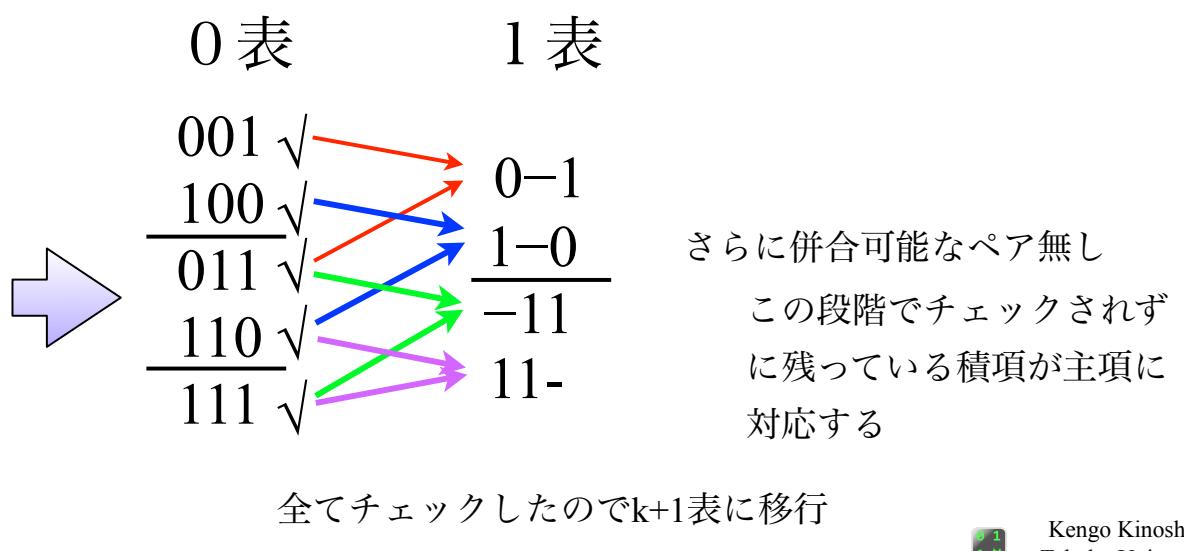
- $\bar{x}_1\bar{x}_2x_3\bar{x}_4\bar{x}_5 \rightarrow 00100$
- $\bar{x}_1\bar{x}_2x_3\bar{x}_4x_5 \rightarrow 00101$
- 併合後： $0010- \rightarrow \bar{x}_1\bar{x}_2x_3\bar{x}_4$
- 「0010-」と「0110-」を併合すると「0-10-」となる
- 併合の結果は部分積項よりリテラルが減っている

クワイン・マクラスキ法とは「併合可能なペア」を系統的に探して、順に併合し、リテラルを減らして簡単にしていく方法である

QM法前半

1. 真理値表 (or 真入力ベクトル) から対応する積項系列表現を作る
2. 積項系列表現の 1 の個数毎に並べ替える (k表)
3. 併合可能なペアを捜す
 - 併合可能なものは 1 文字違いなので、1 の個数が 1 違う所を見る
4. 併合したペアの積項系列表現を記し、併合したペアをチェック ✓
5. 併合可能なペアがなくなるか全てチェックされるまで繰り返す
 - k++して、ステップ 2 に戻るか、終了する

x1	x2	x3	f
0	0	0	0
0	0	1	1
0	1	0	0
0	1	1	1
1	0	0	1
1	0	1	0
1	1	0	1
1	1	1	1



QM法後半：主項表

6. 最終的に残った積項（主項）から主項表を作る
7. $m_i \leq p_j$ となる組み合わせを主項表から探す (x)
8. 縦に見て、×が1つの列を探す → ×がある所が必須主項に対応
9. 必須主項で覆われている最小項を消す
10. 残った最小項があれば、残りの主項からリテラルが少ないものを採用して、全ての最小項が覆われる組み合わせを探す
 - 必須主項と採用した主項の和を取り最簡形を得る

主項表

↓	$\bar{x}_1\bar{x}_2x_3$	$\bar{x}_1x_2x_3$	$x_1x_2\bar{x}_3$	$x_1x_2x_3$	$x_1\bar{x}_2\bar{x}_3$	←最小項 m_i
\bar{x}_1x_3	x					
$x_1\bar{x}_3$		x		x	x	
x_2x_3		x			x	
x_1x_2	x		x	x		

$$f = \bar{x}_1x_3 + x_1\bar{x}_3 + x_1x_2 \quad \text{or} \quad f = \bar{x}_1x_3 + x_1\bar{x}_3 + x_2x_3$$

もう少し複雑な例

$$T(f_2) = \{00110, 00100, 01100, 11100, 10010, 10100, 00011, 00111, 00101, 01001, \\ 01011, 01101, 11111, 11101, 10011, 10111, 10101\}$$

	[0]		[1]		[2]		[3]	
a.	00100	✓	a-c.	0010-	✓	ac-di.	001--	②
b.	00011	✓	a-d.	001-0	✓	ac-fk.	0-10-	1✓
c.	00101	✓	a-f.	0-100	✓	ac-hm.	-010-	2✓
d.	00110	✓	a-h.	-0100	✓	ad-ci.	001--	:acdi
e.	01001	✓	b-i.	00-11	✓	af-ck.	0-10-	:acfk
f.	01100	✓	b-j.	0-011	⑥	af-hn.	--100	3✓
g.	10010	✓	b-l.	-0011	✓	ah-cm.	-010-	:achm
h.	10100	✓	c-i.	001-1	✓	ah-fn.	--100	:afhn
i.	00111	✓	c-k.	0-101	✓	bi-lo.	-0-11	③
j.	01011	✓	c-m.	-0101	✓	bl-io.	-0-11	:bilo
k.	01101	✓	d-i.	0011-	✓	ci-mo.	-01-1	④
l.	10011	✓	e-j.	010-1	⑦	ck-mp.	--101	6✓
m.	10101	✓	e-k.	01-01	⑧	cm-io.	-01-1	:cimo
n.	11100	✓	f-k.	0110-	✓	cm-kp.	--101	:ckmp
o.	10111	✓	f-n.	-1100	✓	fk-np.	-110-	5✓
p.	11101	✓	g-l.	1001-	⑨	fn-kp.	-110-	:fknlp
q.	11111	✓	h-m.	1010-	✓	hm-np.	1-10-	4✓
			h-n.	1-100	✓	hn-mp.	1-10-	:hmnp
			i-o.	-0111	✓	mo-pq.	1-1-1	⑤
			k-p.	-1101	✓	mp-oq.	1-1-1	:mopq
			l-o.	10-11	✓			
			m-o.	101-1	✓			
			m-p.	1-101	✓			
			n-p.	1110-	✓			
			o-q.	1-111	✓			
			p-q.	111-1	✓			

表 3.7 クワイン - マクラスキ法の適用例

例の続き

	a.	b.	c.	d.	e.	f.	g.	h.	i.	j.	k.	l.	m.	n.	o.	p.	q.	
① - - 10 - acfk-	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	必須 1-fhn	
② 0 0 1 - - :acdi	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	必須 2-d	
③ - 0 - 11 :bilo	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x		
④ - 0 1 - 1 :cimo	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x		
⑤ 1 - 1 - 1 :mopq	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	必須 5-q	
⑥ 0 - 0 1 1 :bj	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x		
⑦ 0 1 0 - 1 :ej	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x		
⑧ 0 1 - 0 1 :ek	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x		
⑨ 1 0 0 1 - :gl	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	必須 9-g	
被覆数	2	2	3	1	2	1	1	1	3	2	2	2	3	1	3	2	1	
被覆 by 必須	1,2 ↑	1,2 ↑	2 ↑	1 ↑	9	1	2 ↑	1 ↑	9	1,5	1	5	1,5	5	1,5	5		

表 3.8 主項表

10. 残った最小項があれば、残りの主項からリテラルが少ないものを採用して、全ての最小項が覆われる組み合わせを探す

$$(U_3 + U_6)(U_7 + U_8)(U_6 + U_7) = U_3U_7 + U_6U_7 + U_6U_8$$

主項関数： U_i i 番目の主項を使う

今の場合はどの組み合わせも積項の数が 2 つなので、リテラルの少ないものを選ぶ

$|p_3| = 3, |p_6| = 4, |p_7| = 4, |p_8| = 4$ だから、 U_3U_7 の組み合わせが最も短い

$$f_2 = x_3\bar{x}_4 + \bar{x}_1\bar{x}_2x_3 + x_1x_3x_5 + x_1\bar{x}_2\bar{x}_3x_4 + \bar{x}_2x_4x_5 + \bar{x}_1x_2\bar{x}_3x_5$$

ここまでまとめ：論理関数の簡単化

$$T(f) = \bigcup_{p_j \in Q} T(p_j) \quad Q \subseteq P_j$$

- (a) $|Q|$ が最小
- (b) 式全体で使われるリテラルの個数が最小
($|Q|$ が同じ組み合わせが複数あったら)

- カルノー法
 - 3～6変数に適用可能
 - 分かりやすいけど、見落としなどミスもある
- クワイン・マクラスキ法
 - 変数が多くても大丈夫。ただし、 n^2 程度のメモリが必要なので大きなnでは無理
 - プログラムしやすい

次ページの練習問題(1)、(2)をQM法で解くこと(レポート)

練習問題

(1) 以下のカルノー図で表される論理関数をクワイインマクラスキ法で簡単化しなさい

$$f_3: \quad w = 0 \quad zv$$

xy	00	01	11	10
00	1		1	1
01		1		
11	1	1	1	1
10	1			1

$$\quad w = 1 \quad zv$$

xy	00	01	11	10
00	1		1	1
01		1	1	
11		1	1	
10	1			1

(2) 以下の論理関数をクワイインマクラスキ法で簡単化しなさい

$$\begin{aligned} f(x, y, z, w) = & \bar{x}\bar{y}z\bar{w} + \bar{x}\bar{y}zw + \bar{x}y\bar{z}w + \bar{x}yz\bar{w} + x\bar{y}\bar{z}w \\ & + \bar{x}yzw + x\bar{y}zw + xy\bar{z}w \end{aligned}$$

論理式

- 形式的定義 (3回目でやった)
 - 0,1, 変数は論理式である
 - E, F が論理式の時、 $\overline{E}, (E \cdot F), (E + F), (E \oplus F)$ は論理式である
 - 以上の (1)、(2) だけでできるものが論理式である

基本演算子→論理式の性質→式の変形操作

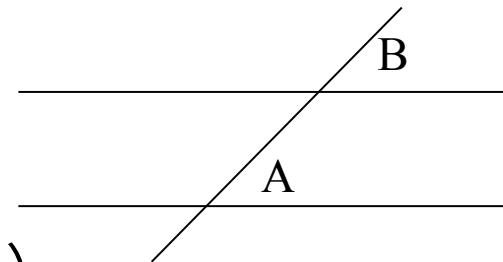
- ここでは逆の見方をする (代数系)

式の変形操作→論理式の性質→論理演算子

- 代数系での定義の流れ
 - 演算子と元の集合を指定する
 - 公理系を定める (この公理系が演算子の意味を定める)

公理とは？

- 他の命題を導くための前提
 - 真実である必要はない
- 公理主義数学
 - 公理から全てを導き、全体として矛盾のない体系を作る
 - 例：ユークリッド幾何学の第5公理
 - 平行線の錯角は等しい($A=B$)
 - 平面では正しいが球面では成立しない
 - 非ユークリッド幾何学



モデル

- モデルとは、抽象代数において対象集合を特定し、演算子を公理系を満たす関数として特定したもの
 - 例 1 : $\langle \mathcal{B}; \cdot, +; 1, 0 \rangle \rightarrow$ 今までやってきた論理関数
 - 例 2 : 命題論理
 - 知識を真偽の決まる文として表現：「1は奇数である」
 - 例 3 : 集合論
- ブール代数の公理系を満たすモデルは沢山ある

公理系の例：ブール代数の公理系

- 演算子と元が具体的に何であるかを特定しない抽象代数

【ブール代数の公理系】[†] ($x, y, z \in \mathcal{B}$)

(1) 単位元	$x \cdot 1 = x$,	$x + 1 = 1$.
(2) 零元	$x \cdot 0 = 0$,	$x + 0 = x$.
(3) べき等律	$x \cdot x = x$,	$x + x = x$.
(4) 交換律	$x \cdot y = y \cdot x$,	$x + y = y + x$.
(5) 結合律	$x \cdot (y \cdot z) = (x \cdot y) \cdot z$,	$x + (y + z) = (x + y) + z$.
(6) 吸収律	$x \cdot (x + y) = x$,	$x + (x \cdot y) = x$.
(7) 分配律	$x \cdot (y + z) = (x \cdot y) + (x \cdot z)$,	$x + (y \cdot z) = (x + y) \cdot (x + z)$.
(8) 相補律	$x \cdot \bar{x} = 0$,	$x + \bar{x} = 1$.
(9) 二重否定	$\bar{\bar{x}} = x$.	
(10) ド・モルガン律	$\overline{x \cdot y} = \bar{x} + \bar{y}$,	$\overline{x + y} = \bar{x} \cdot \bar{y}$.

演算子が公理系から定義されている点に注意

例：演算子 $\bar{}$ が相補律から定義されている

ブール代数の公理系の特徴

- 冗長：他の公理から導ける公理がある

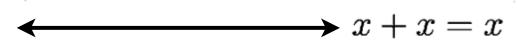
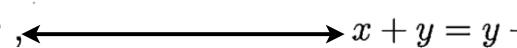
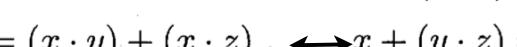
- 例：(6) 吸収律 $x \cdot (x + y) = x$

$$x \cdot (x + y) = xx + xy = x(1 + y) = x$$

(7) 分配律 (3) べき等律 (1) 単位元

- 双対性： \cdot と $+$, 0と1を入れ替えると対になる式が公理に含まれる

【ブール代数の公理系】[†] ($x, y, z \in \mathcal{B}$)

(1) 単位元	$x \cdot 1 = x$,	$x + 1 = 1$.	
(2) 零元	$x \cdot 0 = 0$,	$x + 0 = x$.	
(3) べき等律	$x \cdot x = x$,	$x + x = x$.	
(4) 交換律	$x \cdot y = y \cdot x$,	$x + y = y + x$.	
(5) 結合律	$x \cdot (y \cdot z) = (x \cdot y) \cdot z$,	$x + (y + z) = (x + y) + z$.	
(6) 吸収律	$x \cdot (x + y) = x$,	$x + (x \cdot y) = x$.	
(7) 分配律	$x \cdot (y + z) = (x \cdot y) + (x \cdot z)$,	$x + (y \cdot z) = (x + y) \cdot (x + z)$.	
(8) 相補律	$x \cdot \bar{x} = 0$,	$x + \bar{x} = 1$.	
(9) 二重否定	$\bar{\bar{x}} = x$.		
(10) ド・モルガン律	$\overline{x \cdot y} = \bar{x} + \bar{y}$,	$\overline{x + y} = \bar{x} \cdot \bar{y}$.	

↔ 双対 (dual) な式

非冗長な公理系：ハンチントンの公理系

【ハンチントンの公理系】 (\mathcal{B} はこの公理系で定義される要素の集合である。)

(1) (非自明性) $x \neq y$ となる $x, y \in \mathcal{B}$ が少なくとも 1 組存在する。

(2) (演算子) $x, y \in \mathcal{B}$ ならば, $x \cdot y \in \mathcal{B}$, $x + y \in \mathcal{B}$.

(3) 交換律 $x \cdot y = y \cdot x$, $x + y = y + x$.

(4) 分配律 $x \cdot (y + z) = (x \cdot y) + (x \cdot z)$, $x + (y \cdot z) = (x + y) \cdot (x + z)$.

(5) 単位元・零元 $x \cdot 1 = x$, $x + 0 = x$ となる要素 1, 0 が \mathcal{B} に存在する。

(6) 相補律 $x \cdot \bar{x} = 0$, $x + \bar{x} = 1$ となる $\bar{x} \in \mathcal{B}$ が存在する。

- 冗長でない
- ブール代数の公理系はハンチントンの公理系から導くことが出来る
 - 結合律すら証明の対象 : (5) 結合律 $x \cdot (y \cdot z) = (x \cdot y) \cdot z$, $x + (y + z) = (x + y) + z$.
 - 証明は教科書108ページ

参考：ANDとXORの公理系

- ORの代わりにXOR

- $x + y = x \oplus y \oplus xy$ で置き換え可能

【可換環・体の公理系】[†] (x, y, z は対象集合の元である.)

(R1) 交換律

$$x \oplus y = y \oplus x , \quad x \cdot y = y \cdot x .$$

(R2) 結合律

$$x \oplus (y \oplus z) = (x \oplus y) \oplus z , \quad x \cdot (y \cdot z) = (x \cdot y) \cdot z .$$

(R3) 分配律

$$x \cdot (y \oplus z) = (x \cdot y) \oplus (x \cdot z) , \quad (y \oplus z) \cdot x = (y \cdot x) \oplus (z \cdot x) .$$

(R4) 零元・単位元

$$x \oplus 0 = x , \quad x \cdot 1 = x .$$

(R5) 逆元 (加法)

$\forall x ; \quad x \oplus y = 0$ を満たす解 $y (= -x)$ が存在する.

(F5) 逆元 (乗法)

$\forall x \neq 0 ; \quad x \cdot y = 1$ を満たす解 $y (= x^{-1})$ が存在する.

完全系（万能な系）

- 任意の論理関数は{NOT, AND, OR}で書く事ができた



- {NOT, AND, OR}は完全系（万能な系）であると呼ぶ

- 完全系**：すべての論理関数を表現できる代数系

- 以下の系を始め多くの完全系がある

- {NAND}
- {NOR}
- {EXOR, AND, 1}
- {P, M, 1, 0} (P: パリティ関数、M: 多数決関数)

- 極小完全系**：それ以上演算子を減らせない系

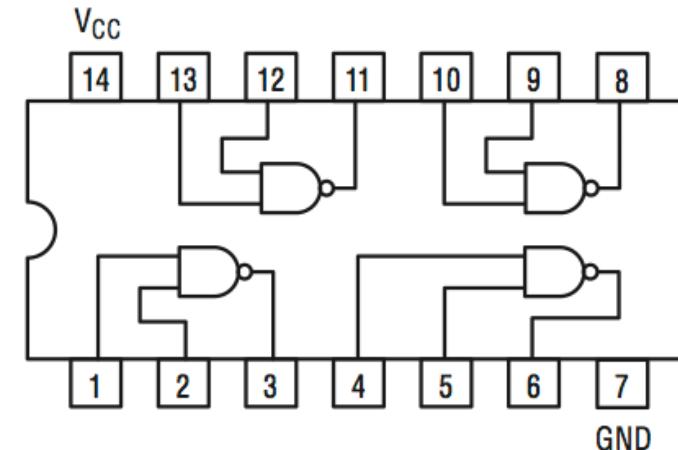
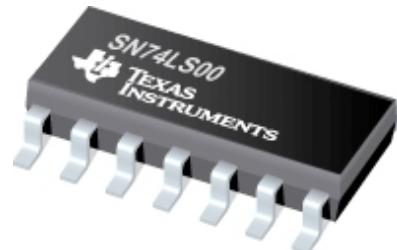
- 例：+は $x + y = \bar{x} + \bar{y} = \overline{\bar{x} \cdot \bar{y}}$ によりNOTとANDに置き換え可能なので、{NOT, AND}も万能で、これ以上は減らせないので、極小完全系。

- 同様に{OR, NOT}、{NOR}、{NAND}なども極小完全系

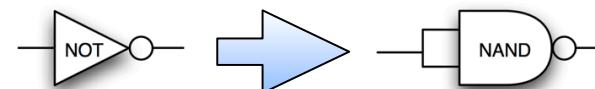


NANDの完全性

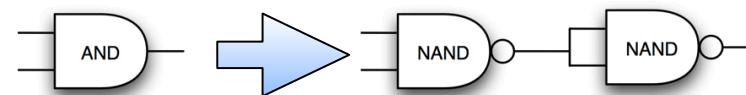
- SN74LS00 (型番的に一番基本的な回路)
 - NANDが4個入ったIC



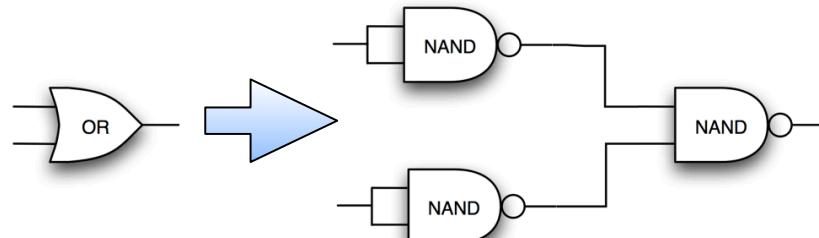
$$\bar{x} = \overline{x \cdot x}$$



$$x \cdot y = \overline{\overline{x} \cdot \overline{y}}$$



$$x + y = \bar{x} + \bar{y} = \overline{\bar{x} \cdot \bar{y}}$$



同族関数

- 変数の交換、変数の否定、関数値の否定を施して出来る新しい論理
関数は、リテラルが異なっているだけで形は同一であると考え、
同族関数と呼ぶ

$$\text{例: } x \cdot y \rightarrow \bar{x} \cdot y \rightarrow x \cdot \bar{y} \rightarrow \bar{x} \cdot \bar{y}$$

$$\rightarrow (\text{関数の否定}) \rightarrow x + y \rightarrow \bar{x} + y \rightarrow x + \bar{y} \rightarrow \bar{x} + \bar{y}$$

- 10個の2変数論理関数のうち上記の8つは全て同族である
 - 残り2つは互いに同族
- $XOR = x\bar{y} + \bar{x}y \rightarrow EQUI = \bar{x}\bar{y} + xy$
- 同様に論理関数の諸性質がp91-p97にまとめられている
 - 期末試験には出しませんが、自習しておくこと